

2024年7月4日(木曜日)
医務国保課 総務・医事グループ
担当者 西川、伊藤(内線 3318、3342)
(ダイヤル)087-832-3315

2024 #つなげプロジェクトオレンジ※ in 保医大

～四国初上映！「みんな生きている ～二つ目の誕生日～」・主演俳優登壇～

骨髄移植には患者とドナーの白血球型の適合が必要。

その確率は数百から数万分の一。

たとえ適合しても、ドナーの都合や健康状態が整わなければ移植はできません。

骨髄バンクドナーや骨髄移植について正しい知識を深めるために

「2024 #つなげプロジェクトオレンジ in 保医大」として、映画上映とパネルトークを開催します。

◆日時◆ 2024年7月29日(月曜日) 14:40～17:50

◆場所◆ 県立保健医療大学 大講義室(高松市牟礼町原 282 番地 | TEL 087-870-1212)

◆対象者◆ 県立保健医療大学 看護学科1年生 70人 臨床検査学科2年生 20人

◆スケジュール◆

14:40～14:45 主催者挨拶

14:45～16:40 映画上映

16:50～17:40 パネルトーク

17:40～17:50 骨髄バンク登録説明・
集合写真撮影



©「みんな生きている ～二つ目の誕生日～」製作プロジェクト

◆パネルトーク登壇者◆

樋口 大悟氏 (俳優・モデル・空手家・(株)リ・ボーン117代表)

骨髄移植を受けたことがきっかけとなり、「ひとつでも多くの命が助かってほしい」という想いを伝えるために、映画「みんな生きている ～二つ目の誕生日～」を企画・原案・主演した。

平井 将幹氏 (骨髄ドナー経験者)

20歳で骨髄ドナーに登録し、その半年後に骨髄ドナーを経験した。

溝渕まどか氏 (骨髄ドナー登録者)

18歳で骨髄ドナーに登録し、21歳からドナー登録説明員として活動を始める。

※「#つなげプロジェクトオレンジ」は、(公財)骨髄バンクが中心となり、白血病などの血液疾患により骨髄移植など必要としている患者さんのため、骨髄バンクやドナーへの理解や支援を広げていく活動

骨髓移植経験者が演じる「いのち」の物語

白血病の青年と骨髓提供を依頼された女性
出会うことのない「患者」と「ドナー」二人を支える人たちの葛藤を描く
まったく新しい「医療エンターテインメント」

樋口大悟
松本若菜
岡田浩暉

武藤令子
大西武志
森下能幸

池田良
中村久美
小笠原大晃
柿本りーね
榎本桜
鈴木周哉
伊澤恵美子

みんな生きている
～二つ目の誕生日～



単なる難病物ではない 全く新しい医療エンターテインメントの誕生です!

俳優の樋口大悟は、25歳の時に白血病を発症した
得意の空手を生かしてアクション俳優になるつもりだった
しかし、病気が全てを変えてしまった……



「助かるためには 骨髄移植しかない」と ドクターは言った……

俳優の樋口大悟は25歳の時に急性骨髄性白血病と診断された。当時、彼は得意な空手を生かしてアクション俳優になるべく稽古を重ねていた。テレビや映画の世界で白血病の事は何となく知ってはいたが、自分がその当事者になるとは夢にも思っていなかった。そして彼の闘病生活は始まる。苦しい抗がん剤治療を経て、一度は寛解を迎えて退院するが、数年後に再発再入院すると、「助かるためには骨髄移植しかない」とドクターに言われた。30歳になる頃、骨髄移植を受け、彼は命を助けられる。何処の誰かも判らない、見知らぬ人の無償の善意によって、第二の人生を手に入れたのだ。

健康を取り戻した彼は、白血病の実態と骨髄移植への理解、ドナー(骨髄提供者)を見つけてくれた骨髄バンク普及のための講演活動を開始する。そして、その集大成として自分の体験を元にした映画製作に乗り出したのだ。

脚本・監督は、「ナースのお仕事」ほか数々の人気ドラマを手掛けてきた両沢和幸。樋口の熱い思いに賛同し、企画段階から参加。ドナーの美智子役を務めるのは、CX系「やんごとなき一族」TX系「復讐の未亡人」などの話題作に出演し注目を浴びる松本若菜。強くも優しい一児の母を演じている。そして、日本骨髄バンクが初期段階から監修を行い、実際の医師や看護師の協力のもと撮影が行われた。

白血病などの難病を題材にした映画はこれまでも沢山あった。しかし、この映画はそれらのどれとも違う。実際に苦しい闘病生活を体験した俳優自らが



演じる圧倒的なリアリティ。そして、これまであまり取り上げられることがなかった、骨髄提供者とその家族の葛藤。決して会えない患者とドナーの目に見えない繋がり。それらを描くことで、単なる難病物ではない、全く新しい医療エンターテインメントが生まれたのだ。

ストーリー

桧山大介(樋口大悟)は空手の講師をしながら、競技者としても全国大会を狙える実力者だった。ある日、稽古の最中に倒れて病院に運ばれると、白血病だと診断された。「この俺が白血病?」最初は軽く考えていたが、病気は彼の人生を大きく変えた。闘病生活のなかで体力は衰え、空手もそして恋人さえも彼の元を去って行った。そしてドクターは言った。「助かるためには骨髄移植しかありません」骨髄移植は血液を作る造血細胞を他人のものを入れ替えるという治療法だが、白血球の型が合わなければ移植は出来ない。どんなに優秀なドクターがいても、造血細胞を提供してくれるドナーがいなければ成立しないのである。彼を救う事が出来るのは、遠く新潟県糸魚川に住む桜井美智子(松本若菜)という女性だけだった。しかし彼女の家族は彼女がドナーになることに反対だった。

プロダクションノート

クライマックスとなる骨髄採取の場面は、実際に採取医であったドクターが自ら演じるだけでなく、麻酔医や看護師の指導にも当たってもらい、今までにないリアルな骨髄採取シーンを撮影することが出来た。



ドナーとなる女性が住む場所は、主役樋口大悟の出身地新潟県糸魚川市に設定された。市の全面協力の元、数々の地元の名所でロケが行われた。最後の見せ場となる場面は、糸魚川駅前通りを全面封鎖し、迫力のある映像を撮影出来た。



シナリオは樋口大悟の実体験をベースに作られ、当時からの友人もそのまま友人役として出演している。日本骨髄バンクには初期段階から脚本の監修も含めて協力して頂き、実状に即したリアリティのある物語となっている。

